

# 「心の響きを表現したい」

## シュールレアリスムの詩人・芸術家

瀧口 修造



### 自分らしい生き方を求めて

お父さんやお母さんは、ぼくが大きくなったら、医者になることを望んでいる。でもぼくは…。

医者いしやの家に生まれた瀧口修造たきぐちしゅうぞうさんは、自分の将来しやうらいについて悩んでいました。

「ぼくが好きなことは、読書よみかきなんだけだな。写真や絵も、おもしろいと思うし…」

少年時代の修造しゅうぞうさんは、よく家の二階にある書庫しょこにこもって、文芸書ぶんげいしょや雑誌ざっしを夢中むちゅうになつて読みふけていました。

読書よみかきをすればするほど、修造しゅうぞうさんの心の中には、文学や絵画などの芸術げいゆつに対する興味きょうみがどんどんふくらんでいきました。

富山中学とやまちゅうがく(現在の富山高校)へ進んだころには、絵や短歌、詩、近代美術にも強い関心かんしんを持ち、セザンヌやゴッホ、カンディンスキー、ピカソなどについて



すでにあるレールの上ではなく  
自分の歩む方向さかたを探しながら  
生きていきたい。  
人生も、芸術も  
そうでなくてはならない—。

修造しゅうぞうさんは、芸術作品の批評ひひうだけでなく、自分でも詩を書いたり、絵画を描いたりしました。

シュールレアリスムって、どんな芸術？

修造しゅうぞうさんは、ヨーロッパで生まれたシュールレアリスム(超現実主義)という芸術を日本に広めた人だよ。



瀧口修造さんのミニ年表

西暦	年齢	
1903年		婦負郡寒江村(現在の富山市)に生まれる
1910年	6歳	寒江村立尋常小学校に入学
1916年	12歳	県立富山中学(現在の富山高校)に入学する
1923年	20歳	慶応義塾大学文学部へ入学するが、すぐに退学し、姉のいる北海道へ行く
1925年	22歳	慶応義塾大学文学部へ再入学する
1931年	29歳	慶応義塾大学文学部卒業 文筆活動の続けながら映画制作を手伝う
1966年	63歳	ジョアン・ミロに会い親交を深める
1969年	66歳	ミロと再会する
1979年	75歳	亡くなる



修造さんが眠っている龍江寺。(富山市大塚)

て書かれた本を、手当たりしだいに読み始めました。しかし、周りの人々は、修造さんが医者になることを期待していました。特に、お母さんは、代々続く瀧口家のことを思い、泣き出さんばかりの様子で、必死に修造さんを説得しようとしていました。「亡くなったお父さんも、どんなに跡を継いでほしいと思っていらいっしやるでしょう。ぜひ医者になっておくれ」

お母さんの言葉に、修造さんの心は、激しくゆれ動きました。そして、自分はどんな人生を歩んだらよいのか、悩み続けました。そんな修造さんが19歳になったとき、お母さんが亡くなりました。それをきっかけに、修造さんは、医学への道をきっぱりと絶ち切りました。「すでにあるレールの上ではなく、自分の歩む方向を探しながら生きていこう」

### シュールレアリスムとの出会い

修造さんにとって、大きな出会いは、大学時代にありました。すぐれた詩人であり、英文学の研究者であった西脇順三郎教授との出会いです。

イギリス留学から帰ってきたばかりの西脇先生の周りでは、芸術について語り合う学生同士のグループができ、修造さんもその一員として、文学や詩、芸術に対する自分の考え方をぶつけました。

「なんてすばらしい先生だ。もっと話したいし、聞きたいこともいっぱいある！」

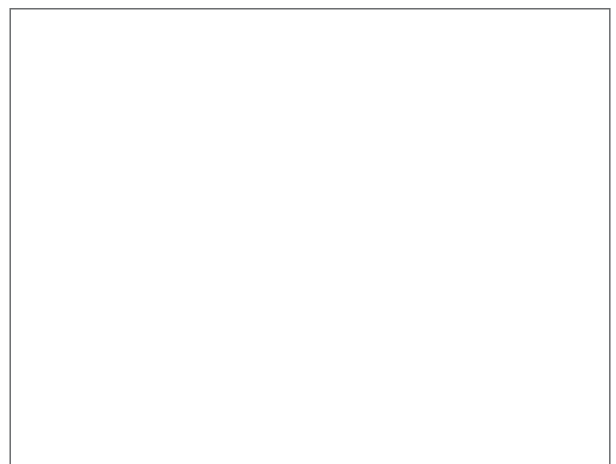
講義が終わると、喫茶店で西脇先生を囲み、みんなで議論を交わし合う日々が続きました。

修造さんが、後に一生をかけて研究することになるシュールレアリスム(超現実主義)と出会ったのも、このころでした。

シュールレアリスムというのは、20世紀初めごろ、ヨーロッパで起こった芸術で、「それまでの常識的なものの見方をやめ、心の内部を見つめて浮かんできたイメージを表現しよう」という運動です。「シュールレアリスムについて、詳しく知りたい。これこそ、ぼくの求めていたものかもしれない！」

修造さんは強く心を動かされ、シュールレアリスムの研究にのめりこんでいきました。そして、アンドレ・ブルトンの『超現実主義と絵画』という本を翻訳しました。

これをきっかけに、修造さんは、詩や文学だけでなく、美術へも深い関心をもつようになったのです。その後、修造さんは、美術評論家として活躍するようになりました。東京国立近代美術館の運営委員をしたり、雑誌や新聞の評論やエッセーを執筆したりするなど、さまざまな活動に取り組みました。



また、音楽や舞台芸術などを組み合わせ、総合的な芸術を創り出そうとするグループ「実験工房」を応援し、新しいタイプの芸術を広めるために協力しました。

## さまざまな表現方法の研究

1958(昭和33)年、修造さんは、イタリアで開かれたベニスビエンナーレ国際展の日本代表審査員として、初めてヨーロッパを訪れました。

「さあ、ヨーロッパの芸術を、しっかりと自分の目で見よう」

修造さんは、イタリアでの仕事を終わると、スペインに行つて画家のダリを訪ねたり、フランスに行つて、シュールレアリスムの中心人物であった、詩人のアンドレ・ブルトンと会つたりして、親交を深めました。

このように、ヨーロッパで多くの芸術や文化にふれた修造さんは、文学や評論だけでなく、別の方法で自分の心を表現したいと考えられるようになり、そんなある日のこと――。

修造さんは、不思議な体験をしました。ふと



富山市立寒江小学校4年生のお友達が、富山県立近代美術館で修造さんの作品を鑑賞しました。

気がつくと、スケッチブックや紙片に奇妙な絵ができていたのです。

「これは、本当に自分が描いたのだろうか！」

まるでペンが勝手に動き出したかのように、修造さんは、いつの間にか絵を描いていたのです。

それからというもの、修造さんは、神秘的な芸術の世界へとめりこんで、さまざまな作品を描くようになりました。

文字のような記号のような線で描かれた作品、万年筆を自由にのびのびと走らせ曲線を描いた作品、インクの上から加えられた水によって、にじんだような淡い色彩が広がる作品…。

それらの作品は、見る人によつて印象が違つてくる幻想的なものでした。修造さんは、さらに夢中になつて、さまざまな表現方法を生み出していきました。

煙のすずを紙にあてたり、焦がしたりするバーント・ドローイング、円を自動的に描くロトデッサン紙の上に絵の具を垂らして別の紙で写しとるデカルコマニーなど、数多くの新しい技法を試していったのです。

## これからの美術のために

「富山県らしい、特色のある美術館を建設したいと考えているので、ぜひ、考えを聞かせてください」ふるさと富山の関係者から、相談を受けた修造さんは、こう答えました。

「名画を集めるだけでは、魅力がないですね。国内に例のない、新しい美術館がいいと思います。巨匠

## 子どもたちの感想

富山市立寒江小学校4年生のお友達の感想です。

ぼくは瀧口さんの絵を見て、にじませた絵やこがした絵があつて「いい絵だなあ」と思いました。それに、いろいろな種類があつて「考えているなあ」と思いました。瀧口さんは、絵も上手だし詩も上手だったので「すごい人だと思います。ぼくも、瀧口さんのような人を目指して生きていきたいです。」(野上凌さん)

わたしは、瀧口さんの生き方は、とてもすばらしいと思います。お金より、心の内の自由を大切にしようというところが、絵は、小さいものが多いけれど、心がこもつていて優しい感じがしました。色づかいも色の濃さもとてもいいねいだから、世界的な芸術家と友達になつて、有名な人になつたんだなあと思いました。(川波彩香さん)



修造さんは、シュールレアリスムを代表する芸術家であるジョアン・ミロさんと深い親交がありました。1978年、修造さんの詩にミロさんの絵を組み合わせさせた詩画集「ミロの星とともに」が出版されました。



修造さんとミロさん：富山県立近代美術館には、「瀧口修造の展示室」があり、修造さんの詩にミロさんが絵をつけた共同作品や、修造さんの制作したデカルコマニーの作品が展示されています。

日本初のお札の  
専門図案官

大野 為次



瀧口修造さんは芸術の分野で活躍しましたが、デザインの分野でも、大野為次さんという先輩が活躍しています。

為次さんは、日本で最初にお札をデザインした人で、子どものころから絵が得意でした。

高岡工芸学校(現在の高岡工芸高校)を卒業し、東京美術学校(現在の東京芸術大学)にすんだ後、宮内省に勤め、調度品のデザインや、天皇陛下の衣装のデザインなどを担当する仕事に就きました。

その後、為次さんは、学校時代の恩師と偶然に再会したことがきっかけで、お札のデザインをすることになりました。

お札のデザインができあがったとき、為次さんの腕前に人々は驚きました。指定された絵柄をバランスよく配置し、桐の透かし彫りで日本らしさを表現していたのです。それは、今までになかった新しいデザインでした。

「大野さんならではの仕事だ。とてもこれ以上のものは作れない」

その後、為次さんは、日本初のお札の専門図案官として百円札や五百円札、千円札など、さまざまなお札のデザインを手がけました。

## デカルコマニーの技法に挑戦

富山市立寒江小学校4年生のお友達が、修造さんの取り組んだデカルコマニーの作品を鑑賞して、次のような感想をもちました。そしてその技法で、作品を作りました。



- 滝のように、本当に水が流れているみたいできれいです。(森 美穂さん)
- だいたい色の夕焼けと夕焼けが波に映っているような広い海みたいです。(中村沙織さん)
- 海の中を見ているようです。水が深くまで青くて、黒い影みたいなのが魚が泳いでいるように見えます。(野上侑也さん)

の作品と、全く無名の作家の作品が並んでいても、ちっともおかしくない美術館であってほしいですね」

修造さんは、芸術の世界で生きていこうとする新人、次の時代をになう人々を大切に考えていました。

芸術は、心の響きを表現したものの。この世を美しく彩る大切なもの——。

修造さんは、一生を通して、文学や美術などの芸術を愛し、表現し続けたのでした。

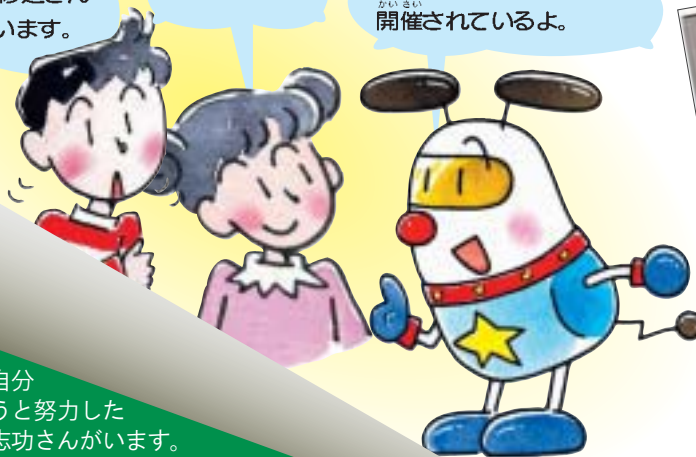


富山県立近代美術館は、1981年7月の開館以来、たくさんの方が訪れています。また、「一日学校美術館」や「子どもアート・ワークショップ」など、さまざまな活動に取り組んでいます。

何歳になっても、夢をもって新しいことに挑戦していった修造さんはすごいと思います。

修造さんの作品も数多くあるんだよね。

富山県立近代美術館では、世界ポスタートリエンナーレなど、国際的な展覧会も開催されているよ。



瀧口修造さんのように美術を愛し、自分だけの表現を究めようと努力した先輩の1人に、棟方志功さんがいます。志功さんは、福光町にゆかりの板画家です。